

---

# 秘密の書架の鍵を開けて

椰子カナタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

秘密の書架の鍵を開けて

### 【Nコード】

N2964W

### 【作者名】

椰子カナタ

### 【あらすじ】

現代社会に紛れ存在する魔法学校。ここに通う落ちこぼれのレンズ、名雲龍牙は自分の魔導書を作るために禁書庫に足を踏み入れる。そこへ、幼なじみであり学校でもトップクラスのエリートである少女、都築葉月が現れる。※pixivから転載しました。

扉が開け放たれる。闇夜に雷鳴の轟くなか、魔王は宿敵の参上を前にして立ち上がった。

雷帝は自身が開けた扉の前で不敵に笑っていた。かかってこいよ。見ているだけで燃やされそうな熱量を秘めた瞳が雄弁に語っている。

魔王はそれを前に同じく満足げな笑みをたたえた。始めようか。魔王の手元には魔道書が浮かぶ。彼の英知の全てを記したこれこそがその強大な魔力を如何なく発揮する唯一不変の媒介である。

古今東西に存在する様々な魔法魔術のなかでも、魔王が最も得意とするのがこれだ。これを手にするだけで、彼は誰よりも強い力を振るえる。杖を振り、呪文を唱える必要などない。

対峙する雷帝は右腕を掲げる。彼の手にも魔導書があった。同じ獲物を持つ二人はやはり、好敵手として戦う運命にあるのだろう。

雷帝の魔道書が光を放つ。迸るエネルギーは電撃となり音を立てて弾けた。彼が雷帝たる所以である雷は全てを照らす光と成り得るのか。

「行くぜ、魔王」

「いいだろう。来い、雷帝よ」

雷帝が腕を振り降ろすと怒号のような轟音を上げて雷が空間を切り裂いていく。同じく魔王が放つ漆黒の闇が、その全てを飲み込まんとして虚空を浸食していく。

全く正反対にして同等の力がぶつかり合う。二つのエネルギーが重なり溶け合うこの光景は荘厳と言っても過言ではなかった。拮抗する力と力のせめぎ合いは激しい光の点滅を伴って互いの優劣を競い合う。

どちらかが勝ち、どちらかが負ける。結果は至ってシンプルであり、だからこそ強大な力は己が勝利のみを求めているのだ。

やがて光は加速度的に収縮を始めた。所詮はこの程度だったか。

魔王の表情に落胆の色が見える。彼はこれまで何もかもをも屈服させてきた。彼と対等に戦える者などこの世に存在しなかった。彼はいつでも自分と同等かそれ以上の存在を求めていただけなのに。

しかし魔王はその表情を改めざるを得なかった。驚愕を露わにして雷帝を見る。雷帝は笑っていた。この状況をむしろ待ち望んでいたかのように。

雷帝の魔道書は既に別の魔法を発動しようとしていた。一筋の閃光が一直線に魔王の身体を魔道書ごと貫く。雷帝が用意していた切り札。魔王の力を封じるための秘策だった。この存在を悟らせまいと、雷帝は馬鹿正直に真っ向勝負を挑んだのだ。

かくして、雷帝と呼ばれ英雄視されてきた魔法使いと、魔王と呼ばれ畏怖の代名詞となった魔法使いの戦いは英雄に軍配が上がった。「ふうっ。地獄で会ったらまた遊ぼうぜ」

雷帝は中指を突き立てて言った。

1.

授業が終わり、長かった日課からの解放感が教室を包む。名雲龍牙も、それを味わっている内の一人であった。一日じゅう机に向かって疲れた疲労を、軽いストレッチでほぐす。

しかしその解放感も長くは続かない。龍牙は鞆を取って立ち上がると、教室を出て図書館へ向かう。連れ立つような友達などいない。なぜなら彼は落ちこぼれだからだ。

才能あるエリートがもてはやされ、落第寸前の落ちこぼれが卑下される。現代社会にまぎれ存在する魔法学校。実力主義の異世界。それが、元々魔法世界とは何の関係もない一般人だった龍牙が今、席を置く場所だ。

「葉月さん、これから街まで降りませんか？」

「おいしいケーキ屋さん、見つけたんですよー！」

龍牙の正面から、リノリウムの床を叩く音とともに女生徒のはし

やぎ声が近づいてくる。学年一のエリートとその取り巻きというグループだった。

輪の中心であるエリート、都築葉月は龍冴に気付いて声をかける。

「あ、龍冴。今日もまた図書館ですか？」

「……俺、お前に話しかけられる覚えなんてないぜ」

気さくに話しかけてきた葉月に対し、龍冴は彼女を一瞥すらせずに冷たく言い放つ。そのまま彼女の横を通り過ぎる。

「ちよつと、龍冴！ 待ってください！」

葉月は足を止めて龍冴に声をかけるが、龍冴は言葉を返すことなく歩き去った。

取り巻きの女生徒たちが苛立ちのままに葉月を急かす。

「葉月さん、あんなの放っておきましょうよっ」

「そーですよ。葉月さんの幼なじみだかなんだか知りませんが、所詮レンズじゃないですか」

「……所詮って何ですか」

葉月は女生徒たちを振り返り、キッと彼女たちを睨みつける。

「何がレンズですか。そんなの、そんなあなたたちが勝手に決めた線引きで、龍冴のことを分かった風にいわないでください！」

葉月が怒鳴りつけると、女生徒たちは返す言葉もなく萎縮した。

どうせ周りの声を真に受けているだけで、自分の物差しなど持っていない連中だ。返す言葉などなくて当然だった。

怒声に身をすくめる取り巻きたちを置いて、葉月は龍冴を追って図書館へ向かった。

※

※

※

図書館のドアは一階にある。龍冴はドアを開け、一番近い席にいた。とにかく、一息ついたかった。彼の目の下には大きな隈があった。

眼鏡を外す。すると周囲の世界は徐々にぼやけてなくなっていく。

適性の高い者は何の補助もなく魔法世界を認識できるが、そうでない者は彼が付けている眼鏡のように特殊な魔法処置を施されたレンズを介す必要がある。

適性が低いながらもこの学校に通う者は少なくはないが、そういった連中は無論例外なく落ちこぼれた。レンズとは、こうした魔法器具がレンズを素材に作られている事から転じて落ちこぼれの総称となり、差別用語としてエリートたちの口癖のように用いられている。

龍牙は休息もそこそこに眼鏡をかけ直し、席を立ついつもの書架へ向かう。

平行に並べられただけの書架の奥へ進むと、やがて入り組んだ迷路のように書架が配置された通路に出る。慣れた足取りで迷路を抜ければ立ち入り禁止の札が掛けられた下り階段まで辿り着ける。この先は地下だ。

立ち入り禁止の札を越え階段を降りた。そこは禁書庫で、危険度の高い魔道書が保管されている。人知を超えた闇の魔法を記した魔道書、悪魔に取り付かれ封印せざるを得なくなった魔道書などその種類は様々だ。

龍牙はここで自分の魔道書を作ろうとしていた。危険だが、落第寸前の彼に正攻法では間に合わない。

まだ未読の魔道書を探して書架を巡る。しばらく没頭しているとふと、足音が聞こえて来た。龍牙は心臓が跳ね上がるのを感じた。こんな所を巡回の教師に見つかれば問答無用で停学か、それ以上の処分が待っているだろう。

声を潜めて身を隠す。

「龍牙、いるんですか？」

聞こえて来たのは葉月の声だった。彼女は恐る恐るといった様子で禁書庫へ足を踏み入れる。無理もない。ここには無断で入った生徒が事故に巻き込まれた事例も少なくないと噂されている。曰く、封印を免れた魔道書が自分を使う者を求めて人を襲うといった類の

ものだ。

幸い龍冴はまだそんな危ない目にあった事はないが、こんな薄暗い場所では根も葉もない噂が立つのも当たり前だろう。

「何しに来たんだ。ったく、危ないぞ、バカ」

龍冴は書架の影から出て彼女の元へ駆け寄った。葉月は龍冴が暗闇から現れたことに驚いたが、気を取り直して言葉を紡ぐ。

「む、心配して様子を見に来たんじゃないですか。なのにあなたって人はすぐそうやって!」

「そりゃあどうも。なら静かにしてくれよ。俺が停学にならないように心配してくれるならな」

「それは……そうですが。言い方があるでしょう、言い方が」

葉月は頬を膨らませて押し黙る。その間に、龍冴は魔道書を探す作業へと戻っていった。

「何、してるんですか」

「……別に。俺の魔道書を作ってるだけだ」

「魔道書を作るって、こんなところですか!？」

思わず大きな声を上げた葉月を、龍冴はじろりと睨む。葉月はバツが悪そうに声を落とす。

「……魔道書は、私たち魔法使いの英知の結晶です。魔法使いは自分の開発した魔法を書に記し、自分の魔力を持って魔道書からそれを再生します。それをこんな場所で作っていたら、あなたの魔道書は闇の魔法に埋もれてしまいますよ」

遙か昔には杖や呪文を用いた魔法もあったが、それらは魔道書の利便性の前に廃れていった。

「教科書通りのありがたいお言葉どうも。でもな、俺には時間がないんだ。落第なんてごめんだね」

「……必要ないのに」

「あん?」

葉月のつぶやきを、龍冴はうまく聞き取れずに問い返した。俯いている彼女の表情は龍冴からは見えない。

「必要ないって言ったんです。あなたは、こんな場所でくだらない魔法に手を染めなくなつて……！」

「……どういう、意味だよ」

葉月はどこか悔しそうに歯を食いしばる。言葉は続かない。龍冴の問いに答える声はない。

やがて、息をついて肩を落とすと、葉月は龍冴へ笑みを向けた。

「いえ、なんでもありません。それより、これを」

葉月は龍冴に一つの魔道書を差し出す。それは彼女の先祖、雷帝の遺した魔道書だった。白い皮張りの表紙に雷を連想させる黄色い模様をあしらった豪華なものである。

「参考に見てください。少なくとも、ここにある魔道書よりは役に立つはずですから」

龍冴は葉月の厚意を前に、照れくさそうに頭を掻いた。彼が受け取るのをためらっていると、葉月は更に魔道書を龍冴へぐつと近づける。

「……ったく、とことんお節介だぜ、お前は」

ぼやきながらも観念した龍冴は、雷帝の魔道書に手を伸ばす。

『おっと、せっかくの獲物が闇に染まってきたところだ。それを渡されては困るな』

「!?!」

どこからともなく聞いたこともないおぞましい声が響いた。辺りを見回してもその姿は見当たらない。不気味な笑い声が周囲を取り巻く。やがて姿を現したのは巨大な影のような化け物だった。

禁書庫の噂は本当だったのだろう。封印を逃れた魔道書が、自分を使う者を求めて人を襲う。おそらく奴は、そんな魔道書の念が形を成した悪魔といったところだろうと龍冴は分析した。その目的も、魔道書の念に準じたもののはずだ。

「龍冴、逃げてください！」



葉月は龍冴を庇うべく腕を広げて彼の前に立つ。しかし龍冴は、葉月を押しのけて悪魔と対峙した。

「冗談じゃない。こいつを試す絶好の機会だ。逃げるならお前が逃げな」

龍冴は自分の魔道書を取り出す。この禁書庫で集めた魔法を記したこれを、今試さずにいつ試すというのだ。

「な、なに言ってるんですか！ そんな作りたての魔道書でいきなり、あんな悪魔と戦えるはずありません！ あなたはただでさえ適性が低いんですよ！？ ここは私に任せて——」

葉月は龍冴の頬を冷や汗が伝うのを見て、言葉を呑んだ。肩も震えている。葉月の言っていることなど、龍冴自身分かり切っているのだ。

「逃げな、葉月。お前を失くしちまったら俺にはもう、何も残らないんだから」

『逃がすと思うか？』

悪魔の、その影のような身体が音もなく伸びる。それは縄のように葉月の身体を縛り付け、捕らえてしまった。

「あ、ぐっ……！」

葉月は締め付ける力に抵抗できず、雷帝の魔道書を落としてしまう。

「ちっ……！ てめえっ！」

龍冴は魔道書の魔法を行使しようと試みる。しかし初めて使う魔法であり、葉月を捕らえられた焦りもあってか魔道書は何の反応も示さない。

影は龍冴の身体も捕らえた。闇が、龍冴と葉月を包み込み、その存在を侵食していく。抗おうともがいても、力が抜けていく身体を動かす事は次第に困難を極めた。薄れていく意識の中、龍冴は葉月のことだけを考えていた。

幼い頃から俺の傍にいてくれた葉月。でも彼女の傍にいたいと願っているのは他でもない俺自身だったんだ。だから俺は彼女の生きべき世界を受け入れ、ここまで付いてきた。これから彼女の隣を歩く事が俺の望み。だから俺は必死になって、禁じられた魔道書にまで手を伸ばして。その結果がこれだ。持たざる者が身に余る力を得ようとした罪は今まさに裁かれようとしていた。

「俺は、まだ生きてるのか……」

漆黒の闇の中、龍冴と葉月は寄り添うように寝そべっていた。彼ら以外には何も存在しない暗闇の世界。ここが闇か。龍冴は不思議な懐かしさを感じていた。ずっと昔、生まれるより遥か彼方の時間の中で俺はこんな闇の世界に生きていたような気がする。

「龍冴……」

葉月の手が龍冴の頬に伸びる。小さくて柔らかい感触はそのまま彼女の暖かさや優しさを表しているようだった。お前と二人きりでいられるのなら、こんな世界も悪くはないのかもしれないな。

「闇に、囚われないで」

何を言っているんだ。ここには俺たちの他には誰もいない。こんな素晴らしい場所が他にあるものか。

「違う。これはあの悪魔が作り出した幻想に過ぎません。お願い、眼を覚まして。屈しないで。あんな化け物に私たちの身体も、未来も、投げ渡しては駄目——！！」

「葉月……」

葉月の手が龍冴の胸元へ滑り落ちる。そこにある何かを探すかのように。やがて彼女の手が光を放ち、龍冴の胸を貫いていった。

※ ※ ※

実体を持っていなかった悪魔の身体が人の形を成した。龍冴と葉月の命をその身に取り込み、自身を魔王として降臨させようとした

悪魔の目論みは既に果たされようとしている。

『これだ。この力で私が新たな魔王となる』

「やめておけ」

『何……!?!?』

悪魔の背後から突如として人の声がした。悪魔は驚愕に表情を染めて振り返る。そこにいたのは今しがた自身の中に取り込んだばかりの少年だったからだ。しかし彼は今、先ほどまで装着していた眼鏡を胸ポケットにしまっていた。

龍牙はゆっくりと悪魔の脇を抜け、葉月が落とした雷帝の魔道書を拾い上げる。

「封印されるほどでもない魔道書から生まれた存在が、随分粋がってくれたものだな」

『貴様は、一体……?!?』

龍牙の手には二つの魔道書があった。一つは今しがた拾い上げた雷帝の魔道書。これを開き、龍牙は記された魔法を行使する。電気の帯が辺りを包み、薄暗い禁書庫は日の光に照らされたかのような明るさを得た。この照明に悪魔はたまらず顔を覆う。闇の存在である悪魔にこの明るさは毒以外の何物でもないだろう。

『まさか貴様が雷帝だともいうのか……!?!?』

たじろぎながら、悪魔は抑えられない疑問を口にする。この男が雷帝であるというならば自身に勝ち目はない。魔王になるという悲願も叶わず封印されてしまうのがオチだ。しかし龍牙の語る事實は悪魔を更なる絶望へと陥れる。

「そんな訳があるまい。この魔道書が目に入らないのか?」

龍牙の持つもう一つの魔道書は漆黒の皮で作られた表紙に黄金の意匠を施した尊大極まりない代物だった。魔法学校の生徒が持つような品ではない。では一体、誰の魔道書だと言うのか。

「その程度の存在で魔王だと? 笑わせるなよ。魔王とは、もっと気高く純粹で、深き闇の存在だ」

龍牙の放つ殺意に恐れをなした悪魔は、彼に背を向け逃げ出そう

とした。

「人の心の闇に付け込まなければ力を使えないような下卑た存在が、魔王を名乗るなどおこがましいにも程がある」

龍牙は封印されていた魔王の魔道書を手に、下劣な悪魔を見下ろす。

「とっとと消えろ。二度と俺の前に姿を見せるなよ、三下」

漆黒の闇が空間を浸食していく。龍牙は腕を伸ばし掌で自身の力の行方をコントロールしていた。まるで目の前に悪魔がいるかのようには首元を引き寄せ、頭を掴み、握り潰す。莫大な力の奔流は悪魔を飲み込んで塵一つ残さず消してしまった。

### 3.

「魔王は雷帝によってその力を封じられ、普通の人間になったの。封印された力は血筋の中に眠ったまま、その家系の人々に受け継がれていた。そしてその子孫があなたという訳なの」

この事実が雷帝の家系の者にのみ語り継がれ、雷帝の家系は魔王の家系の監視役となった。だから葉月は幼い頃から龍牙の近くにいたのだ。魔王の書架の鍵を持つ彼女たちは常に龍牙たちの力の行方を見守り、時に封印が解けそうになればそれを阻止するために傍らにいた。

葉月は龍牙の胸元に手をかざし、丁寧に魔法を掛けていく。雷帝の家系に伝わる封印の魔法。かつて雷帝が魔王を封印したのと同じ魔法だ。一筋の閃光が龍牙を魔道書ごと貫き、魔道書を埋め込んでいく。

龍牙は自身の膨大な魔力が消えていくのを感じた。世界は再び壮大なかくれんぼを始めた。世界の認識が歪んでいく。

魔王の力には再び封印を施すことを決めた。少しずつ、この力を制御していけるようにやっていくと決めたのだ。

「ま、これからもよろしく頼むぜ。俺はお前がいないと力を使えな

いんだからよ」

「なんですか、偉そうに。私はそのためだけにあなたのそばに  
わけではないんですよ？」

「……そうだな。俺もだよ、葉月」

龍牙は眼鏡を掛け直す。世界は元の形を取り戻していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2964w/>

---

秘密の書架の鍵を開けて

2011年10月9日15時25分発行